■表音文字の表意化

ローマ字は、文字そのものとしてはこのやうに欠陥の多い文字であるが、長い年代に亙って使用してゐると、その欠陥がむしろ長所に変って行くものである。それが“伝統”といふものであり“伝統”を重んじなければいけない理由はそこにある。

表音文字は容器に過ぎないけれども、長い間使用してゐれば、自然と中身が着いて来るのである。綴りの固りが、長い年月の間に、独特の形象を形作って視覚に訴へるやうになるので、“表語文字”のやうな効果を発揮するのである。

例へば、次の例を御覧頂きたい。

cite	cent	so	saw
site	sent	sow	soar
sight	scent	sew	sore

ここに挙げた四組の三語づつの言葉は、それぞれ綴りは異ってゐるけれども、発音は全く同じ言葉である。発音は同じでも、その綴りが互ひに異ってゐて、それぞれに独特の形象を形作ってゐるので、一見してその発音と意味とが瞬時に理解できるのである。これが同じ綴りであったら、読めても意味は直には理解できないであらう。

だから、表音文字でも、長い年代に亙ってその綴りを固く守り続けてゐるならば、かなり、“表語文字”に近い効果を有つ文字になるものだといふことが解る。

英語やフランス語の綴りは、著しくその発音からかけ離れてゐるけれども、そのお蔭で解り易くなってゐるのである。だから、その綴りを大切に保持して来たのである。決して不便を忍んでさうして来たのではない。

ところが、学者といふものは実にひねくれた見方をするもので、「言葉の発音から離れた綴り」は“表音文字の堕落”であると言ってこれを憎んでゐるのである。「表音文字は、音声を忠実に表してゐてこそ“表音文字”である。音声を忠実に表さない綴りなど怪しからぬ」と言ふわけである。

「表音文字は音声を表すための文字であるから、言葉の表記はいつもその言葉の発音を正しく表すやうに努力すべきである。言葉は長い年月の間には変化して行くものであるから、その変化に応じて、綴りを改め、いつもその発音を正しく表す綴りにして置くべきである」といふのが彼らの考へ方なのである。

だから、かのムーア・ハウスは次のやうに言ってゐる。

「英語の綴りを学ぶことが、中国語におとらずむつかしくなってしまふ。そのくらゐなら改革する方がよいのに決ってゐる」と。

ムーア・ハウスはまたこんな事も言ってゐる。

「その治療法は、我々の綴りを発音通りにすることによって改革することである。然し、言ふは易く、行ふは難し。綴りの改革の問題ほど、特に歴史的背景に無智な人々の間では、激怒を買ふ問題は他に無い」と。

彼は「無智な人々が綴り改革に反対し、激怒する」と言ってゐるけれども、「さう言ふ彼の方がよっぽど無智である」と私は思ふ。伝統のある綴りを「改革する方がよいに決ってゐる」と言ふ者が賢明であるはずがない。